

岐阜農林事務所の普及活動状況 令和6年10月30日現在

今月の重点活動

■新規就農者支援 令和6年度岐阜地域農業担い手情報交換会を開催

岐阜農林事務所は10月28日、岐阜地域農業改良普及事業推進協議会（岐阜地域の市町、JA等で構成）、岐阜地域就農支援協議会との共催で、JAぎふ本店大会議室にて岐阜地域農業担い手情報交換会を開催した。この情報交換会は「新規就農者の技術向上と経営の安定、また新規就農者が孤立することなく、地域農業の担い手として独り立ちできるようにすること」を目的に、就農5年目未満の若手農業者と担い手リーダー代表者等の先進的農業経営者、関係機関担当者を参集し、75名が出席した。



【深谷代表による講演の様子】

当日は、今年度新規に就農した農業者が自己紹介を行った後、就農応援隊長を務める女性農業経営アドバイザー岐阜ブロックの西川ひとみ会長から激励の言葉をいただいた。その後、羽島市で施設園芸経営を行う先輩新規就農者の石原宏紀氏による事例発表と、深谷経営研究所の深谷定弘代表による講演が行われた。

講師の深谷氏は愛知県経済農業協同組合連合会のOBで、中小企業診断士として経営改善や生産性向上の支援に携わられている。農業総生産額は変わっていないが、青果物流通は卸売市場からスーパーへの流れが基本であり「市場流通を意識すること」、経営は成行きまかせではなく、いつ・どこで・何を・どうやって取り組むか、「ゴールを明確に想定すること」が経営者として求められるなどを講演いただいた。

事例発表や講演では出席者から質問が多く出された。また、情報交換会終了後には、別会場で交流会を開催し、参加者による親睦を深めた。農林事務所は、今後も担い手の経営安定に向けた支援を継続していく。

（地域支援第一係）

安心で身近な「ぎふの食」づくり

■にんにく りん清流GAP評価制度の事前審査を実施

山県市で平成20年から、にんにく生産加工に取り組んでいる梅田建設美濃山県元気ファームでは、今年度のりん清流GAP評価制度の認証取得を目指している。GAPの取組みは初めてであることから、農林事務所では令和6年7月から認証取得に向けた支援を行ってきた。

10月24日、りん清流GAP評価制度の127評価項目に基づき、書類整備や農場の運営状況について事前審査を実施した。初めてGAPに取り組むとあって、必要書類の確認・整備及び「3S活動（整理・整頓・清掃）」等を確認しながら進めた。まだまだ課題は多く、特に農薬保管庫の整備を進めていく必要があり、書類整備にも注力していくこととした。



【事前審査の様子】

今後も農林事務所では、今年度中のりん清流GAP評価制度の認証取得を目指した支援を継続していく。

（地域支援第三係）

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■いちご 高温対策の現地実証試験

令和5年作の「岐阜いちご」については、記録的な高温により花芽分化が大幅に遅延し、年内収量が大きく減少かつ全収量も平年を大きく下回り、生産、販売で大きな課題を残す結果となった。いちごの安定生産のためには花芽分化、特に最初の花芽となる頂花房を適期に分化させることが必要である。このため、本年、花芽分化安定のための高温対策として、育苗ハウスの高温抑制、苗の冷蔵処理による花芽分化促進について現地実証試験を実施している。育苗ハウスの高温抑制では遮熱剤塗布、遮熱遮光資材等の利用、苗の冷蔵処理では4日×2回の間欠冷蔵処理、14日間の株冷蔵処理について検証している。

9月に花芽検鏡による花芽分化確認調査、10月以降、本ぽでの出蕾、開花調査を実施しており、各試験の花芽分化に及ぼす影響について結果が出つつある状況である。農林事務所では今後も各処理の生育や収穫期、果実肥大等に関する調査の支援を行い、結果をまとめていくこととしている。

(園芸産地支援第二係)



【遮熱剤の塗布作業の様子】

■かき 本年作のかきの生育と出荷見込み

本年作のかきは開花期以降、順調に生育していたものの、7月梅雨明け以降の記録的な高温や少雨、強い日射により日焼け果の発生が見られるようになった。また、8月以降からカメムシの発生が多くなり、吸汁による落下被害果の発生がほ場で見られるようになった。さらに、9月以降も平年を大きく上回る高温が継続しており、果実の肥大や着色が進まない状態となっている。昨年、着色の遅れで収穫のピークが12月となった「富有」については、本年も同様に収穫時期が遅延する見込みで、生育調査から判断した出荷ピークは12月4日頃となる見込みである。



【着色が遅れた富有柿】

近年、温暖化の影響によりかきの生育については、春の開花は早く、秋の収穫は遅くなる傾向が顕著となっており、従来より栽培管理を必要とする期間が長くなっている。農林事務所では生育状況や病虫害発生状況等の情報提供を適期に行い、かきの高品質安定生産のための支援を行っていく。

(園芸産地支援第二係)

■水稲 「御膳粳」の取り組み

各務原市では、江戸時代に徳川将軍へ献上されたとされる米「御膳粳」が作られていたという記録が残っており、JAぎふや市内水稲生産者と協力して当時に近い形での栽培に挑戦するプロジェクトに取り組んでいる。

農林事務所は10月15日に「御膳粳」の収量調査と品質調査を実施した。今年は登熟期間が高温で推移した影響により、白未熟米がやや多く、昨年に比べると品質は低下していた。しかし、10a当たりの収量は461kgとなり、昨年の450kgを上回る収量を得ることができた。

農林事務所では関係機関と協力し、今年度の結果を踏まえ、「御膳粳」の歴史的背景を踏まえた栽培方法の確立から、収量と品質を安定させ、付加価値を高めるため認知度の向上を目指し支援していく。

(地域支援第二係)



【御膳粳ほ場の様子】

■守口大根 「だいこんにあった土づくり」研修会を開催

岐阜市則武地区周辺は、古くから守口大根の産地として知られ、JAぎふ大根部会守口大根生産委員会が、同じく守口大根の産地である愛知県扶桑町で扶桑町守口大根漬物組合が生産を行っている。現在、国内流通の守口大根は、岐阜県が約3分の1、愛知県が約3分の2を占め、それぞれ「飛騨美濃伝統野菜」、「あいちの伝統野菜」として認定されている。なお、生産の歴史は古く、昭和33年には、両者によって岐阜愛知守口大根生産連絡協議会が設立され、両産地の情報交換や生産振興のための活動を行っている。

10月23日、グランヴェール岐山を会場に栽培研修会が開催され、岐阜県と愛知県の生産者、守口漬暖簾会、JAぎふ、JA愛知北、扶桑町、事務局を務める岐阜市、農林事務所らが出席した。これまで、新型コロナウイルス感染症対策のため研修会活動を自粛しており、3年ぶりの開催となった。

農林事務所からは「だいこんにあった土づくり」と題して、協議会会長の高橋司郎さんが長年実践してきた「緑肥栽培技術」を中心に講義を行い、木曽川扇状地の特徴や緑肥による土壌改良及び減肥、土壌管理の方法などについても説明した。生産者だけでなく、暖簾会からも興味深く、よく理解できたとの意見がいただけた。

産地の維持発展に向け、岐阜市役所、JAぎふ、その他関係団体とも協力し、今後も支援を継続する。

(園芸産地支援第一係)



【緑肥説明資料の抜粋】